学推だより vol.12

KOKURA
Elementary School
February 9th / MON / 2015
発行：学推担当

これから求められる学習指導について⑥。

各教科・領域等の授業実践を振り返る中で。

今号は「アクティブ・ラーニング」の「**協働的に学ぶ**」の視点について書かせていただきたいと思います。

□「課題の発見・解決に向けて**協働的に学ぶ**」について

まず，「協働」という言葉のとらえ方についてですが，先生方もご存知の通り，**グループ学習がそのまま協働的な学習にはならない**ことを確認しておきたいと思います。その説明は紙面の都合上割愛致しますが，詳細につきましては学推担当までご一報ください。

さて，子どもたちが仲間とともに学習を進める方法として，これまでに様々な学習方法が存在しています。代表的なものを右に示しましたが，もちろんこれら以外にもあります。「この学習方法を取り入れれば協働学習になる」「これを行えば，子どもは協働的に学ぶ」というわけではありません。これらはあくまでも，**子どもたちが協働的に学ぶためのきっかけ（手段の一つ）**としてとらえておくことがよいと考えます。大切なことは，子どもたちの姿です。右のような学習方法を取り入れた先に，どのような子どもたちの姿があるのかを見極めることが重要になってきます。

- **バズ学習**
- **生徒チーム学習**
- **ジグソー法**
- **グループ研究法**
- **協力学習法**
- **LTD** (Learning through discussion)
- **ワールドカフェ　等**

右に示した学習方法は，２つの理論から成り立っているそうです。１つ目は「個人で学ぶよりも集団で学ぶ方が達成度が高い」という理論と，２つ目は「競争的関係の学びよりも協力的関係の学びの方が達成度が高い」という理論です。これらは学習方法（授業技術）として定式化されやすいこともあって，広く普及したと言われています。

これらのことから言えることは，子どもたちの協働的な学びを促すためには，**「学習内容とは無関係に，単に授業技術としてこれらの学習方法を授業の中に位置付けることではない」**ということだと考えます。つまり，これからは次のような力が教師には求められてくるのではないでしょうか。

学習内容に応じてこれらのような学習方法を
効果的に活用し，子どもたちの学びの姿を見極める力

では，どのような姿を「協働的に学ぶ姿」ととらえればよいのか。次号の学推だよりで紹介させていただきます。

【引用資料】　『協同学習入門』　杉江修二　著　ナカニシヤ出版（2011）
『学校を改革する』　佐藤　学　著　岩波書店（2012）